大会アピール

　すべての教職員のみなさん

　「教え子を再び戦場に送るな」。この誓いのもと、戦後の教育は歩み始めました。日本国憲法が施行されて７０年となる今日、私たちを取り巻く現状は深刻さを増しています。

　職場は多忙をきわめ、子どもたちとじっくり向き合うことは、いっそう困難になってきました。教職員が自由に意見を出し合って合意を形成する営みはしだいに姿を消しつつあり、悩みや疑問を気軽に口にすることすら難しくなっています。私たちの息苦しさと不安は増し、「語り合いたい」「支えてほしい」という願いとは裏腹に、自らの心身を守ることだけで精いっぱいにさせられています。いっぽう、教育勅語を基本方針に掲げる学校が計画され、これに対して府が認可を与え政府が国有地を不正に払い下げていたという事実が明らかになりました。憲法の理念に基づく健全な教育活動を行ってきた学校を次々とつぶし、教育予算を年々削りながら、国家のために命を捨てることを教える学校に「特例」措置を行うなど、断じて許すことができません。

　２０１６年、「ポスト・トゥルース」が時代を表す言葉となりました。真実そのものではなく、「真実そうだが真実ではないこと」が人々の感情に訴え、世論が形成されるという現象が世界的に広がっています。先日、内閣からの「ミサイルに関する通知」が学校現場にまで下ろされるという前代未聞の事態が起こりました。この「通知」は「安全のための呼びかけ」を装いながら、「ミサイル攻撃が現実に迫っている」ことを国民に信じ込ませ、不安と恐怖を煽るメッセージであったことは明らかです。現政権の暴走ぶりは一昨年の「戦争法」成立以降さらに加速し、私たちは「共謀罪」＝治安維持法の復活という局面さえ迎えています。戦争する国づくりは、着々と実行に移されようとしています。

　しかし、学校は、子どもたちに真実ではないことを信じ込ませ、不安と恐怖を植え付ける場所であってはなりません。他国との間に横たわっている困難を乗り越え、無益な紛争を食い止めるのは、人間の理性と知性に他ならないからです。それを育む場が学校であり、教室です。

　２０１６年１２月、ゆいま～るに参加し沖縄を訪れた青年教職員たちは、基地とたたかう人々と出会い、驚くべき現実を自分の目で、耳で学び、こう語りました。「涙なしには聞けない話ばかりだった」、「自分の無知を恥じ、愕然とした」、「自分はこれまで政治や社会の問題を口にしないようにしてきた。自分には知識がなさすぎる、意識が低すぎると感じていたから。でも今回の経験は一人でも多くの人に伝えていきたい。わたしが口を閉ざすことは、この問題に意識を向ける誰かを失うことだから」。

　私たち教職員が、不安におびえ、語り合うことを遠ざけ、息をひそめて過ごすことは、日本と世界の未来にとって最も不幸なことだと言わなければなりません。世界では，核兵器使用を禁止する条約を作ろうとする人々の大きなうねりが、核保有国を包囲しつつあります。誰もが平和で自由な社会に生きたい。この願いは国境を越え、誰がどんなに強い力で押さえつけても、とどまることはないのです。私たちは孤立した存在などではありません。子どもたちの未来を損ない、私たちの目を真実からそらせるものとは何なのか、ともに考え、語り合いましょう。勇気をもって、あらゆる偽りやまやかし、差別や分断と正面から闘いましょう。侮蔑や憎悪ではなく、共感と連帯を広げる運動を一緒につくっていきましょう。

　教え子を再び戦場に送らない。この誓いを、私たちはいま新たに胸に刻み、ともに歩もうではありませんか。

２０１７年５月２０日　府高教第８８回定期大会